

吟道賀堂流近畿本部
創立50周年記念誌

50th
Anniversary

～未来へ はばたく 賀堂吟～



吟道賀堂流近畿本部
50周年記念

吟の心

賀峰

吟は祈りである 心に神がやどる

心の燃焼である 冷たい心は燃えない

吟は調和である ここ人生の美が輝やく

吟の道は情である この道は利害を超える

吟の道は愚である この道は瞑(まこと)を克服する

吟は行である 生の終りまで続く

命は天にある 易々として 徒りのみ

吟道賀堂流
記念誌







賀堂流は姫路で生まれたと伺っている。諸先輩の活躍で播磨の地から広められた。姫路の文化の大事な一翼を担っている。

姫路市は二〇二〇年の東京オリンピックもありスポーツと文化の充実に取り組んでいる。文化では、樺本大進さんによるル・ポン国際音楽祭赤穂・姫路が毎年開催されている。

姫路市長の祝辞より抜粋)

姫路市は姫路で生まれたと伺っている。諸先輩の活躍で播磨の地から広められた。姫路の文化の大事な一翼を担っている。



Adonis japonica Bl.
アドニス・日本アドニス
Matsudaira, T. やまとりんご (ヤマトリンゴ)

(儀部宗家の祝辞より抜粋)

高齢化、会員減少の厳しい環境下、幹部役員と会員のご協力ご尽力で活動力ある吟詠組織を維持されるよう願っています。

吟詠は素晴らしい伝統文化芸能であり、心身の健康に良い。吟の仲間を増やして次世代に継承されるよう吟を楽しみ研鑽に努め、自信と誇りを持って吟詠の素晴らしさを伝え続けて下さい。

記念大会を契機に賀堂流近畿本部が魚住賀久会長を中心に絆を強め更に発展されるよう祈念します。



現宗家
崇吟社 磯部賀堂(博史)



二代宗家
崇吟社(故) 磯部賀堂(利夫)



初代宗家
崇吟社(故) 磯部賀堂(捨三郎)



五代会長
崇吟社(故) 田村賀峰



四代会長
宗範(故) 小山賀觀



三代会長
宗範(故) 内藤賀峠



二代会長
宗範(故) 山本賀省



初代会長
崇吟社(故) 田村賀峰



姫路市キャラクター
しろまるひめ



現会長
宗範(故) 魚住賀久



六代会長
宗範(故) 山下賀久峰



五代会長
宗範(故) 竹内賀孝

歴代宗家 近畿本部会長



※大道不器の出典『礼記』学記
「大道」は聖人が踏み行う大きい道の意。
「器」は器物・道具で、ある用途・作用しきならず」と訓読する。

大道不器
タヒドウキ
吟道モ亦々然リ
ギンドウマシカ

人の行う大きい道は、限られた物しか盛ることのできない器とは異なり、広く大きな作用を發揮することができるものであるということ。
「大道」は聖人が踏み行う大きい道の意。
「器」は器物・道具で、ある用途・作用しきならず」と訓読する。

最後になりましたが、吟道賀堂流近畿本部の今後益々のご隆盛と、会員の皆様の一層のご活躍とご健勝を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

「ふるさと姫路」への誇りを高め、このノートには司馬遼太郎や和辻哲郎、初井しづ枝、五十嵐播水など、姫路ゆかりの作品も多数掲載しております。

このように姫路で学んだ子供たちが成長し、生涯学習として、詩吟をたしなむようになれば、それは、姫路というつながりの中で、地域の伝統文化が継承していく一つの形として、大変素晴らしいことだと感じております。

最後になりましたが、吟道賀堂流近畿本部の今後益々のご隆盛と、会員の皆様の一層のご活躍とご健勝を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

「ふるさと姫路」への誇りを高め、このノートには司馬遼太郎や和辻哲郎、初井しづ枝、五十嵐播水など、姫路ゆかりの作品も多数掲載しております。

この後、子供たちによる吟詠発表もあるそうですが、大変楽しみにしているところでございます。

近畿本部の皆様には、今後もうまい、愛する気持ちの育成を期して、このノートには司馬遼太郎や和辻哲郎、初井しづ枝、五十嵐播水など、姫路ゆかりの作品も多数掲載しております。

この後、子供たちによる吟詠発表もあるそうですが、大変楽しみにしているところでございます。

近畿本部の皆様には、今後もうまい、愛する気持ちの育成を期して、このノートには司馬遼太郎や和辻哲郎、初井しづ枝、五十嵐播水など、姫路ゆかりの作品も多数掲載しております。

祝辞



姫路市長
石見利勝

祝辞



姫路市教育委員会 教育長
中杉隆夫

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部
長賀住魚久

あたり、歴代の会長並びに諸先輩には長年に亘り大変なご苦労を乗り越えられ、今まで導かれた偉業に対し、心より敬意と感謝を申し上げます。

この記念誌には、近畿本部十九の全吟詠会が紹介されています。各吟詠会の変遷がよく分かり当時を追憶できます。

平成二十九年、吟道賀堂流近畿本部は創立五十周年を迎えた。これを記念して大会を開催するに当たり、二年半に亘る準備期間を設け、近畿本部全会員の賛同を得て、創立五十周年記念大会の実施と記念誌発行の運びになりました。

平成二十九年十月二十八日(土)、姫路市文化センター大ホールに於いて創立五十周年記念吟詠大会を開催。雨天にも関わらずご来賓の石見姫路市長・中杉姫路市教育長様を始め、吟劍詩舞道連盟の 笹野華翠・濱野鯉正両先生、詩吟関係より磯部賀堂宗家、中国本部・京都本部会長のご臨席を賜り盛会裏に終える事が出来ました。さて、創立五十周年を省みて、由緒ある姫路藩校の吟詠を継承するに

北辰吟詠会



会長 肥塚賀禮

当吟詠会は平成十一年に組織強化の方針のもと、仁寿吟詠会、最上吟詠会、宍粟吟詠会、但馬吟詠会の四つの吟詠会の統合で結成された。仁寿吟詠会は昭和四十八年に組織され昭和六十二年に清朗吟詠会、関電連合吟詠会を併合して設立。最上吟詠会は昭和五十三年宍粟吟詠会から分離、宍粟吟詠会は昭和四十四年結成、但馬吟詠会は昭和四十六年しらさぎ吟詠会から分離とそれぞれの歴史があります。

四つの吟詠会統合で会員数一五三名の構成で北辰吟詠会が結成された。北辰の名称は北極星を中心としたから結成時近畿本部の名誉会長であった故小山賀観師が命名された。

平成十六年に但馬支部が分かれ征和支部が残る。但馬吟詠会が再発足された。平成二十四年に松柏吟詠会

が結成時は小山賀観師が名誉会長、辻賀畔師が会長、副会長には肥塚賀禮、藤井賀導、竹澤賀鴨、森下賀励樹の各先生の名前が記載されている。現在は肥塚賀禮会長、進藤賀励勝、石井賀崇石、木下賀織の三氏が副会長を務めている。

しらさぎ吟詠会



会長 小林賀雷

の播州清光会が北辰に合流。今年で結成十八年になる。この間橋本賀建、森下賀励樹、小山賀觀、辻賀畔、村尾賀鳳村の多くの優れた師を見送りました。

当吟詠会は五つの支部で構成され、仁寿、最上、姫路、征和、播州清光会が活動している。主な行事として、発足の平成十一年十一月二十三日結成記念吟詠大会を開催。この期日を北辰の記念日とし「親睦の集い」を毎年開催し会員相互の親睦を図っている。吟のレベル向上の目的で例年二月に研修会を実施。

今後について、結成時の一五三名が平成二十九年五十九名と四割の減少で対策に取り組んでいる。最近入会された方の意見を聞くと、入会の機会提供が無かつたとの指摘があった。会員一人ひとりが勧誘するアクションを起こすことが求められています。

当吟詠会は昭和四十二年に創始し、会の名称をしらさぎ吟詠会と命名する。初代会長に蟹井賀康師が就任。山下賀穂、野々村賀永、長岡賀窓、藤井賀猛の各会長へ継承され現在小林賀雷会長に至る。

昭和四十三年二月には第一回吟詠大会を開催。近畿相互銀行姫路支店ホールにて、来賓に田村賀峰師、山本賀省師、太田賀蕉師、三枝賀松が出席。昭和四十六年から四十九年にかけて県連秋季大会で女子合吟チームが連続優勝する。昭和五十六年には第一回夏季競吟大会を魚友会館で開催。昭和五十七年に第一回初吟会を開催。

平成四年には創立三十五周年記念吟詠大会・故山本賀省師を偲ぶ会を姫路キヤッスルホテルで開催。一八五名の参加。平成二十年三月には創立五十周年記念大会をラヴィーナ姫路で開催。藤井賀猛会長下一六〇名の参加で盛大に祝う。平成二十四年の参加で盛大に祝う。平成二十九年

賀峰吟詠会



会長 小林賀雷

一月に初吟会を飾磨市民センターで開催。同年七月には夏季大会を龍野クラシック・アネックスで開催した。

当吟詠会は十三支部で構成されており。愛盛支部・岡山京山支部・峰勝支部・琴峰支部・播陽支部。主たる行事として初吟会、年二回の勉強会を実施し会員の結束と融合を図っています。

当吟詠会は九つの支部で構成されています。七曜会・大手門・翠和会・賀菴会・賀松峰会・全但会・峰勝支部・琴峰支部・播陽支部。主たる行事として初吟会、年二回の勉強会を実施し会員の結束と融合を図っています。

時代は変革を求めています。賀峰先生宅で開かれた会が設立の基礎となりました。昭和五十二年田村先生が突然天上に旅立たれた。昭和五十七年十一月十五日に賀峰先生七回忌を迎える。この回忌を記念とすべく八杉賀荘会長の指揮で「吟の心」と題して記念誌を発行。賀峰師の年譜や遺詠データを作成。平成八年一月の交歓会には、新たな組織を構築し、播陽吟詠会・琴峰吟詠会・天王山吟詠会が加入四つの吟詠会が統合された。以後会員の減少などで幾多の吟詠会が加入し現在に至る。

平成十二年には賀峰先生二十五回忌追善として追慕参拝記念碑（故寺尾賀勝師作製のステンレス製）を伊豆の大瀬崎にある吟道の碑境内に建立して参拝しました。平成十四年にも同地を訪ねて奉納吟詠と記念碑の申上げます。

記念誌発刊に寄せて



会長 倉賀松峰

確認を会員と共に実施。

山下賀久峰前会長について、賀久峰先生は八杉賀荘師が逝去されて後、平成三年から平成二十六年まで長きに亘り会長職を務められた。

「和をもつて尊し」が信条の先生は、四吟詠会の統合、吟道の碑建立は、事業など発案され実現への手腕を發揮されました。また家業の合間をぬつて近畿本部会長の重責を担われ、総本部八十周年事業に多大な貢献をされた。

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部
長賀住魚久

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部
長賀住魚久

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部
長賀住魚久

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部
長賀住魚久

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部
長賀住魚久

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部
長賀住魚久

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部
長賀住魚久

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部
長賀住魚久

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部
長賀住魚久

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部
長賀住魚久

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部
長賀住魚久

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部
長賀住魚久

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部
長賀住魚久

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部
長賀住魚久

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部
長賀住魚久

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部
長賀住魚久

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部
長賀住魚久

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部
長賀住魚久

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部
長賀住魚久

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部
長賀住魚久

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部
長賀住魚久

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部
長賀住魚久

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部
長賀住魚久

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部
長賀住魚久

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部
長賀住魚久

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部
長賀住魚久

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部
長賀住魚久

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部
長賀住魚久

記念誌発刊に寄せて



吟道賀堂流近畿本部<br

白陽吟詠会



会長 少賀 町野

当吟詠会の歴史は昭和三十四年に遡る。故田村賀峰師が姫路朗吟会を再建され、白陽の基礎が生まれた。昭和三十五年頃から新しい指導者が続々と誕生し、白陽吟詠会関係では、下寺・電話局・山崎・東伸・白浜・姫警支部の結成があった。各支部の指導者は、故渡辺賀校・渡辺賀鏡先生を中心にして互いに切磋琢磨し吟の習熟に励む。

昭和四十三年に六支部五十二名を統合して白陽吟詠会が発足の運びとなつた。賀校師の自宅が下寺町であつたことが縁で「白鷺城の南に羽ばたく吟詠仲間の会」の意味で白陽と名付けられた。

昭和四十三年に六支部五十二名を統合して白陽吟詠会が発足の運びとなつた。賀校師の自宅が下寺町であつたことが縁で「白鷺城の南に羽ばたく吟詠仲間の会」の意味で白陽と名付けられた。

一方「老いてますます壯ん」から引用して第一回老壯大会を昭和五十二年九月十一日に開催し、以来四十回と大会を続けている。独吟の発表の場である校鏡大会は三十八回の歴史があった。

社会環境の変化、会員の減少により平成十五年より老壯大会と校鏡大会を統合して開催している。特に四段以上八十歳以上の会員には寿賞を贈呈し祝っている。全会員を対象とした研修会において難解な譜節の解説、和歌、今様などレベルアップに取り組んでいる。

当吟詠会は十六の支部で構成。下寺・NTTOB・白浜・好古学園・百寿会・田寺・山崎・伊勢・糸引・辻井・なごみ・姫山・御立・溝口・岩屋・忍町である。二十九年度の再登録で大人一四一名・少年五名で本部諸行事に積極的に参加している。

「人生は邂逅なり」との賀校先生の格言を大切に守り、今日まで導いて下さった先輩諸師の遺訓を引き継ぎ、一歩一歩着実に会の発展に向け進んでいきたい。

中播吟詠会



会長 藤尾賀承順

当吟詠会は、昭和三十八年十月にしらさぎ吟詠会溝口支部として産声を上げました。当時は故三枝賀松師が指導されており、昭和四十九年五月に中播吟詠会として独立して発足しました。

故大野賀彦会長、故福岡賀香昇会長の偉大な先生のもと多くの会員が集い昭和六十年には会員数が一七〇名を数えるように成長しました。平成五年には創立三十周年記念大会を開催。近畿本部から多くの先生にご臨席頂きました。

その後は、長年に亘り指導された各支部の先生方が逝去され、多くの支部が閉鎖され会員の減少が続きました。現在は十四名の会員で練習に励んでいます。

平成二十七年十一月二十三日には、中播吟詠会創立五十周年記念大会を開催。十四名の会員が一致団結して大会の実現に奔走し、想像以上の二〇〇余名の参加で会場が満席となりました。

当吟詠会は、昭和三十八年十月にしらさぎ吟詠会溝口支部として産声を上げました。当時は故三枝賀松師が指導されており、昭和四十九年五月に中播吟詠会として独立して発足しました。

故大野賀彦会長、故福岡賀香昇会長の偉大な先生のもと多くの会員が集い昭和六十年には会員数が一七〇名を数えるように成長しました。平成五年には創立三十周年記念大会を開催。近畿本部から多くの先生にご臨席頂きました。

その後は、長年に亘り指導された各支部の先生方が逝去され、多くの支部が閉鎖され会員の減少が続きました。現在は十四名の会員で練習に励んでいます。

平成二十七年十一月二十三日には、中播吟詠会創立五十周年記念大会を開催。十四名の会員が一致団結して大会の実現に奔走し、想像以上の二〇〇余名の参加で会場が満席となりました。



松柏吟詠会



会長 清水賀操

当吟詠会は、昭和四十九年に四名の指導者が集まり設立されました。当時の支部は中地支部（石坂賀昭）、平松支部（清水賀操）、京口支部（寺尾賀勝）、勝原支部（川口賀崇）の四支部一一九名の会員が在籍しました。

現在は中地支部・平松支部・京口会支部の三支部で活動しています。

平成二十九年の主な行事は、一月二十五日に姫路商工会議所の清交クラブにおいて「吟を楽しむ会」を開催し会員の親睦を深めました。

十月八日には相生にあるホテル万葉岬で上郡吟詠会と松柏吟詠会がジョイントして「ふれあいの吟詠発表会」を開催。約四十名の参加で得意な吟を披露して会員同士の絆を強めました。



ボタニカルアート提供：上田 真理

太子吟詠会



会長 太田賀延

当吟詠会は、昭和三十六年五月しらさぎ吟詠会太子支部として発足。昭和四十四年一月に太子吟詠会を設立し太子支部・御津支部・佐用支部の三支部で活動していました。

詩吟人口の減少や高齢化に伴い支部の存続が厳しくなり支部を統合して太子吟詠会に一本化し現在に至っています。

聖徳太子ゆかりの地、斑鳩寺を中心に南北には室津の漁港を眺望し、南東には新舞子の浜を遠望できる環境にあり詩吟を学ぶには絶好の場所で日夜「賀堂吟」の鍛錬を重ねています。

平成二十八年度は、太田賀延会長のもと創立五十五周年を迎え、会員一同大きな喜びと共に益々吟の研鑽を積み、当吟詠会の発展を誓い合つたところです。平成二十九年度から稽古場の変更に



伴つて各地の稽古場の時間帯や場所を明記した一覧表を作成。どのグループに属しても練習の見学並びに指導者先生の教えを乞うことが出来る等幅広い学習方法も採用して、会員の要望に応えるように努めています。

このような取り組みによつて吟詠会の仲間のつながりを大きく拡げ、様々な疑問への対応各種意見が会の運営に反映されるよう心掛けています。一方どの様にすれば詩吟仲間の増強につながるのか、若い人達にも受け入れられるかを真剣に考え、市・町の文化祭やイベントにもできたり出演し吟のPRと勧誘に努めています。幸いにして意欲のあるメンバーも加入され新しいグループが形成されつつあります。

初心を忘れずに若い方々と古参の会員とが共に新しい波に乗つて更に研鑽を積むことこそ新旧の絆となるとの確信をもつています。会員一同が未来を見据え伝統ある賀堂流の繼承者の一員となるよう精進し、吟道に邁進してまいります。

北播吟詠会



會長
山端賀鶴

当吟詠会は、昭和四十五年五月に神崎郡福崎町八千種において初代会長田路賀童師を指導者として二名で発足。昭和四十六年二月北条支部、八月福崎支部、翌年四月泉支部、七月加西支部と拡大し増加の一途を辿る。昭和五十八年には六十五支部五十三名の会員を擁しました。賀童師は福崎町、加西市全域、多可郡、加東郡、西脇市など意欲的に指導に廻

上郡吟詠会



會長
河端賀強雄

当吟詠会の始まりは、上郡での賀堂流の詩吟の始まりを起源としています。昭和九年頃だと言われています。戦時中は盛んでしたが終戦後は衰退しました。

めた昭和三十四年に一人の先生が三人の生徒を指導されたのが当吟詠会の誕生になりました。四年後は会員が五十人となり、詩吟のブームを迎えて会員が増え昭和五十年後半に最盛期を迎え二〇〇余名になりました。当時会員は皆若くて吟の向上に熱心で昇格試験に多くの会員が挑戦し活動も充実していました。

毎年恒例の新春吟詠大会を上郡町中央公民館で開催。立派な会場での書道吟、詩舞、華道吟、構成吟など内容も多彩で多くの参加者で賑わいました。主な行事として、二～三ヶ月に一回のサイクルで稽古場の合同練習を実施し、会員相互の優れた吟を習得し大変参考になつてゐる。地域活動の一環として上郡町文化協会の発表会への参加や自治会等のイベントに積極的に参加して詩吟の魅力を広めています。会員の親睦を図る目的でバス旅行を実施し、赤穂吟詠

会との交流吟詠大会など充実した活動が認められています。昨今の時代の変化で私達の吟詠も趣味の多様化、高齢化が進み会員の減少が避けられません。日本の伝統芸能で親しまれた吟詠も残念ですが入会者が減少しています。これまでの竹内賀孝師、小寺賀藤師を始め多くの先輩に感謝するとともに上郡吟詠会を守り発展させていく決意をしています。会員は明るくて吟の勉強に熱心です。各行事に積極的・協力的に参加され老人福祉施設の慰問や近畿本部の大会、県連主催の大会に出吟し優秀な成績を収めています。当吟詠会の支部は四支部で、段町支部（河端賀強雄）大枝支部（三木賀帆輝）尾長谷支部（福井賀邦幸）あけばの支部（板倉賀航淳）で構成しています。



赤穂吟詠会



会長
木山賀莢

当吟詠会は、昭和四十一年七月赤穂大石神社の社務所において初代宗家儀部賀堂師をお招きして赤穂双巴ツバキ詩吟会が発足されました。

昭和四十二年三月
の春のことでした
後再開されたのか
会の名称も二度変
更し赤穂吟詠会の
名称で現在に至つ
ています。



東播吟詠会



会長
福本賀柑敏

教本を片手に皆さんと一緒に練習することになり、まさに出会いの一言が今私の原形だと痛感しています。当時の仲間は変遷もあり時の流れを感じます。

が交流を深め伝統文化、伝統芸能の賀堂吟を後世へ継承する橋渡しの責務を痛感しています。

最近入会された方を紹介します。小西正敏さんと本間正泰さんの二名です。先輩からの勧誘やご本人の希望が入会理由です。

現在活躍の会員は藤原賀恵千さんで会員の増強や指導に精力を注いでいます。

当吟詠会は九つの支部で構成されています。恵応支部・紅梅支部・やよい支部・斗竜支部・萌黄支部・東鶴支部・曾我井支部・山田支部・中町支部です。

私事ですが入会動機として三十年前に旧友と出会った時、詩吟を始めではと誘われ、稽古場には二十数名の会員が声を出しておられました。



写真提供：三木賀健僕

会員だけの発表会でなく多くの観客が行ってみたくなる工夫が必要だ。狭い視野で物事を決める時代はとっくに終わっている。ネット社会と言われるよう活用する媒体は増えています。効果的に利用して詩吟の良さを広く知つてもらうことが大切。若い会員を増やしていくには、若い人達の意見を聴取することも忘れてはならない。今回の記念大会は多くの観客が吟詠芸能を楽しんでいた貴重な時間であった。

世界へ誘うのも一つの試みではないでしょうか。趣味としての吟詠が素晴らしいものだと気づいている今がグッドタイミングだと。創立五十年を契機としてサブタイトルに表現している「未来へはばたく賀堂吟」の精神をしつかり胸に秘めて歩んで行けばその夢は必ずや実現します。

この子供達が大人になって吟詠を継承してくれることを期待して。

として飛翔する鶴でロビーを飾っていた。姫路観光コンベンションビューローから觀光のガイドブック・マップなどの提供もあった。お城などの観光施設の割引券も専用のものを作成提供いただいた。景品もメモ帳やお菓子の詰合せなど用意して。楽しんで頂いてお世話をした部員の疲れも吹っ飛ぶくらい。吟詠の大会は、もっと楽しめる場所を用意し休憩させる工夫が必要だ。一般の弱い所なのかも知れない。会員を増やす一番の近道は、まずお誘いして見てもらうことだ。吟詠の世界を体験することで吟の良さを知つて頂き、習つてみたいと思わせることが必要。

（略）



剪画提供：グラフィックデザイナー・剪画家 小坂通泰

私達教養広報部六名は記念大会の記録担当のお世話をしました。五十周年記念誌を作成するのが重要な責務でした。一年前から準備に取り掛かり、姫路市文化センターのロビーを楽しい場所に出来ないか部員でミーティングを行う。一般のお客様も沢山招待しているのでくつろげる空間づくりに色々なアイデアを出し合った。飾りつけをどうするのか、ありがとうメッセージカードをどう飾り見てもらうのか。世界文化遺産の姫路城の絵葉書をお借りできた。先生の作品は姫路城の絵葉書にもなっています。ロビーの彩りにともその一つです。剪画で有名な小坂通泰先生に相談したところ快諾頂き、作品三点を提出された姫路城の観光ポスターも華を添えてくれた。メッセージカードは姫路市内の米谷紙管製造の大きな紙管を二本用意する。高さは2m、直径が六十cmの円柱である。この円柱の周囲にメッセージカードを貼ることにした。カードをどのように並べるのか女性部員が中心に検討を加える。模造紙に一定の枚数を添付する。この添付した模造紙を円柱の側面に貼り付けることにした。作業は難航したが前日夜遅くまでかかり多くの皆様に心配をして頂いた。また会場担当の先生方の献身的な応援で無事にセットが完了したときは喜び心の中で叫んでいた。忘れていたがバルーンを効果的に使つて華やいだ雰囲気にしてことも楽しに思い出だ。折り鶴を沢山折つて飾りつけに工夫を凝らす。未来へ羽ばたくシンボル

記念大会をサポートして

（略）

50年を回顧して

年号	重要な出来事	流行歌	近畿本部の歩み
昭和四十一年	ミニスカート流行	真っ赤な太陽	賀堂流姫路本部結成 会長に田村賀峰氏
昭和四十三年	三億円事件	恋の季節	西播詩吟会 会長に金尾賀空氏
昭和四十四年	アポロ十一号月面着陸	黒ネコのタンゴ	哲尊流賀堂流交歓吟詠大会
昭和四十五年	日本万国博覧会 大阪	知床旅情	
昭和四十六年	ニクソンショック	また逢う日まで	
昭和四十七年	あさま山荘事件	女の道	
昭和四十八年	札幌オリンピック	姫路本部を近畿総本部に改称	
昭和四十九年	第一次オイルショック	神田川	
昭和五十年	連続企業爆破事件	襟裳岬	
昭和五十一年	ベトナム戦争終戦	およげ！たいやきくん	
昭和五十二年	ロッキード事件	北の宿から	
昭和五十三年	王貞治ホームラン世界記録七五六号	津軽海峡冬景色	
昭和五十四年	日中平和友好条約締結	近畿総本部婦人部結成十周年記念大会	
昭和五十五年	共通一次試験開始	田村賀峰師逝去	
昭和五十六年	静岡駅前地下街爆発事故	近畿総本部会長 山本賀省氏	
昭和五十七年	千代の富士横綱昇進	近畿ニユース第一号発行	
昭和五十八年	日航三五〇便羽田冲墜落事故	田村賀峰師一周忌追悼大会	
昭和五十九年	グリコ・森永事件	近畿総本部少年部発表会 第一回目を開催	
昭和六十一年	つくば万博開催	県連秋季大会 合吟競吟 西播男子チーム優勝	
		創流五十周年第一回企画会議	
		県連秋季大会 合吟競吟 姫郎女子チーム優勝	
		創流五十周年記念全国吟道大会	
		近畿総本部会長に内藤賀峠氏	



50周年 記念大会 役員会



創立五十周年記念大会を詠む

白陽吟詠会の桑名賀紫淳先生が指導されている会員で、

好古学園支部の濱口日出夫さんの嬉しいニュースです。

濱口さんの姉夫婦である小坂文之・小坂佐紀子様が一般招待で記念大会をご覧になられました。痛く感動され俳句を二句送つて頂きました。皆で吟詠したいと譜節も申請され認められています。

題名は「秋深き」と「吟詠の」の二題です。好古学園支部でも俳句を吟詠して記念大会の余韻を楽しんでおられます。吟の持っている人と人を繋ぐ力を実感します。

記念大会を機会に多くの方々に吟詠の素晴らしさを体験してもらい吟友を増やす一助になれば最高です。

秋深き　吟詠のこゑ　力あり　小坂文之

吟詠の　響ける館や　秋深し　小坂佐紀子

NO.11	秋深き	吟詠のこゑ	力あり	小坂文之
NO.12	小坂佐紀子	吟詠の	響ける館や	秋深し
NO.13	小坂佐紀子	吟詠の	響ける館や	秋深し
NO.14	小坂佐紀子	吟詠の	響ける館や	秋深し
NO.15	小坂佐紀子	吟詠の	響ける館や	秋深し



編集後記

五〇周年記念誌担当委員長 石井賀崇石

初代宗家磯部賀堂師が昭和九年十一月姫路朗吟奨励会を興されて姫路の地で賀堂流は産声をあげた。日支事変、太平洋戦争、敗戦後の中断空白を経て再興復活し隆盛期を経て現在へ至る。私達の近畿本部も五十年の佳節を迎えて、記念大会も無事に盛会裏に終えた。

私達会員の喜びをいま初代宗家は黄泉の国からどんな思いでご覧になられたでしょうか。姫路に生まれ花開いた吟道賀堂流の貴重な文化の花を、日本の誇れる芸術文化の火を、日本人の心の糧である吟詠文化を、流行の華美に流されず、本来の賀堂の灯を永遠に後世に繋げようと、叱咤激励と厚い思いでご覧になったと確信します。初代磯部賀堂師に思いを馳せつつ、今大会をふりかえり、将来への責任と自覚を新たにしました。編集に当たられた諸先生に深く感謝します。



吟道賀堂流近畿本部

創立五十周年記念誌

発行日 二〇一八年(平成三十年)三月一日

編集・発行 吟道賀堂流近畿本部

〒670-1094
兵庫県姫路市日出町三丁目二十四一一〇

T E L ○七九一二八五一二二六七

未来へ はばたく 賀堂吟
50年を契機に 次世代へつなごう!
近畿本部 50周年記念

琢磨結会幾重年

賀岬

只說虛心人慕賢

会を結んで 琢磨 幾重の年、

繼起吟詠無限趣

只說く 虚心 人は賢を慕う。

繼起の吟詠 無限の趣き、

流芳共和自通玄

りゅうほう こうわ おのづから玄に通ず。